

牧師室から (2021.8.29)

かつて地方にいた頃、礼拝出席が20名ほどの教会に1年半通ったことがあった。当時は小生も若かったので、色々な教会員からはしばしばご自宅にお招き頂いたり、牧師館にもよく呼ばれ、ちやほやされていた。そのような中で、自分より二回りほど年上のカメラ好きで粹なお兄さんがいた。まだ世間をよく知らない自分を、あれこれアメとムチで面倒を見てくれたことをよく思い出す。あっという間の1年半であった。いよいよお別れとなると送別会を開いてくださり、お馴染の「神共にいまして♪」を謳ってくださった。最後に教会からプレゼントを頂いたが、それはからし色のトレーナーだった。最初その色を見て「あれ？」と思ったが、その後よく人から「良い色だね、良く似合うよ」と言われるようになった。その服の左胸すなわち丁度心臓に当たるところには、小さく『intermezzo』(間奏曲)と記され、そのすぐ下には八分音符が一つついていた。その時思ったのは、この教会では1年半という短い期間であったので、それは人生ドラマの一つ、いやむしろ幕間の狂言のような意味であるのかな、と思った。するとそのお兄さんは最後に、この世の人生自体が、ある意味、間奏曲のようなものであるということ、一言つけ加えてくださったのを覚えている。

小生は間奏曲というとブラームスの作品が思い浮かぶ。大衆性には欠けており多くの人に膾炙されはしないが、しかし芸術性の高い曲である。彼は北ドイツ出身のプロテスタント信者であり、その固くて渋いいぶし銀のような人柄が滲み出ている。彼の最後の作品となったのは11のコラール前奏曲というオルガン曲であるが、それは教会にとっても重宝なものとなっている。

これらのことについては、近いうちに発行予定の『会報えびな』に、少し詳しく記そうと考えているので、宜しければそちらもお読みいただければ幸いである。

(鈴木淳一牧師)